

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370597

研究課題名(和文)日本語自律学習プログラムにおける担当教師集団のダイナミズム形成プロセス

研究課題名(英文)The Dynamism Formation Process of the Group of Teachers in Charge of the Autonomous Learning Program for Japanese as a Second Language

研究代表者

齋藤 伸子(SAITO, NOBUKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：90337890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：日本語授業「チュートリアル」は、自律学習を基本方針とし、授業を担当する教師全員にとって新しい授業形態であった。そのため、関わる教師達が議論を重ねながらシラバスを作り、運用してきた。

議事録を年表化することにより、教師達が議論の中で「自律」の概念を問い直し、修正しながらプログラムを運用してきた実態が見えた。また教師へのインタビュー内容から、チュートリアルが継続されてきたプロセスには、個々の教師の経験や意見が集団で共有され、実践の中で増幅されてダイナミズムを形成し、再び個人に戻るサイクルが見られることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Japanese language class "tutorial", which are guided by the basic principle of autonomous learning, were a new teaching format for all teachers in charge. Accordingly, the teachers involved began to prepare and apply syllabi while engaging in ongoing discussions. By tabulating the minutes of these discussions chronologically, it is possible to see how these teachers revisited and modified the notion of "learner autonomy" in their discussions as they put their programs into operation. Moreover, from the details of instructor interviews, it was also suggested that the process by which the tutorials were continued was characterized by an observable cycle in which individual teachers' experiences and opinions were shared and then amplified in practice, leading to the formation of a dynamism that fed back to the individuals concerned.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 自律学習 学習者オートノミー チュートリアル ダイナミズム 教師集団

1. 研究開始当初の背景

自律学習とは「学習者が自分で自分の学習の責任をもつ (Dickinson1987・他)」ことであると言われる。国を挙げてグローバル化に対応する教育が求められている現在、より自律的かつ協働的な個人の育成は、年少者教育から高等教育まですべての教育段階で求められている。自律的な学習者には「諸々の制約との相互行為の中で自分にとって最善の選択肢を選んでいく能力」が必要であると青木他(2011)は述べるが、自律的な学習者を育成するために、教師は教育現場でどのように行動すればよいのだろうか。その具体的な形は明らかにされていない。

研究代表者の所属する大学では、留学生を対象とした日本語プログラムにおいて 2003 年度から現在まで 10 余年に渡り、自律学習を基盤とした日本語授業「チュートリアル」を実施してきた。チュートリアルは、個々の学習者が自分で学習目標を設定し、学習内容を決め、計画を立てて実践し、自己評価する形態の授業である。学部留学生と交換留学生、初級から上級までを対象として常時 10 数クラスにおいて実施し、のべ 150 名を超える教師が担当してきた。

H18~20 の科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号 18520412 代表:齋藤伸子)では、チュートリアルの実践内容の分析をとおして実践モデルの構築を目指したが、研究を進める中で、カリキュラム、シラバスを決めても自律学習プログラムの運用はできないという実態が明らかになってきた。H20 に行った教師に対するインタビューでは、「プログラム内の教員組織の目に見えないチームワークや組織を動かすダイナミズムなくして本プログラムは動かない」という趣旨の発言が複数あった。

しかし、ダイナミズムがどのようにプログラムを動かしてきたのかという問いに、H18-20 の研究では答えることができなかった。そこで本研究では経年的な分析をとおして教師集団のダイナミズム形成過程の実態を明らかにし、自律学習を支える教師と教師集団の役割について考察することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自律学習を基本方針とする言語教育プログラムの実践において、実践に関わる教師集団のダイナミズム形成の実態を、経年的な分析を通して解明することにある。研究対象は、桜美林大学において 2003 年度から本研究開始時まで実施している、自律学習を基盤とした日本語授業「チュートリアル」の実践に関わる教師である。

チュートリアルは新しい授業形態であったため、授業担当者が議論を重ねて実施内容や方法を決め、授業を実施し、修正しながら運営してきた。そのプロセスは、個々の教師の経験や意見が集団で共有され、実践の中で増幅されて再び個人に戻るサイクルであ

った。このプロセスを、個々の教師の変容と教師集団のダイナミズム形成過程の相互作用ととらえ、教育現場の文脈と時間の流れの中でその実態を解明することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究方法および関連理論についての調査

チュートリアルの実践に関わった教員からなる研究協力者により読書会を 8 回実施し、青木直子・中田賀之編(2011)『学習者オートノミー 日本語教育と外国語教育の未来のために』などを読み、内容について議論した。アメリカ合衆国のテキサス大学オースティン校における学習者オートノミーに関する聞き取り調査(2014 年 2~3 月)を行った。

学習者の自律を推進するための様々な理論と授業実践についての知見を深めるため、研究者および研究協力者が研修会に参加し、その結果を持ち寄り討議した。さらに、言語教育全般からの視点で現象を見るヒントを得る目的で、日本語教育以外の外国語教育関係者とも話し合い、チュートリアル授業実践の関係者が自律学習に関する自己のビリーフを確認した。

具体的には、日本語教育学会春季大会(2013 年 5 月 25、26 日)、同秋季大会(2013 年 10 月 12 日、13 日)、東京外国語大学・留学生日本語教育センター日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点主催国際シンポジウム「言語教育における e ポートフォリオの活用」(2014 年 3 月 14 日)、日本外国語教育推進機構(JACTFL) シンポジウム「第 2 回外国語教育の未来を拓く グローバル時代を生き抜くための外国語教育」(2014 年 3 月 1 日)に、研究代表者、連携研究者、研究協力者のいずれかが参加し、情報交換および情報収集を行った。

JALT(全国語学教育学会)の JALT2014: 第 40 回全国語学教育学会年次国際大会(2014 年)において、研究代表者と連携研究者が発表し、外部の研究者より研究に関するコメントを得た。その結果、多くの教育機関においては、教師が自律学習に興味をもってもプログラムとして実施することが困難な実態が依然あることが明らかになり、研究対象となるプログラムの特異性が再認識された。

(2) 研究会の実施

桜美林大学外国語教育部門の主催による第 2 回外国語教員研修会を後援した(2014 年 1 月 29 日)。研修会中外国語科目担当教員による実践シェアのプログラムの中で、研究協力者が自律学習の取り組みについて紹介し、参加者とディスカッションを行った。

(3) 年表データベースの見直し

連携研究者および研究協力者と 4 回のミーティングを行い、平成 18 年度から 20 年度の科研費補助金研究の一環として作成した、

2003~2008 年度春学期までの、チュートリアルの実践に関わる約 200 個のデジタルファイルとその内容を時系列に配列整理した年表形式のデータベースを見直し、不足している情報を補足した。さらに、研究に利用しやすい形で整理し、年表を完成させた。

(4) 教員へのインタビューの実施

チュートリアルに関わってきた教員にインタビューを行った。個別インタビューを 3 名に行った後、グループインタビューを行った。グループインタビューにより、調査対象者の記憶が活性化し、より具体的なデータを得ることができた。

インタビューの結果は質的研究データ分析方法を用いて分析した。

(5) ダイナミズムの形成についての考察

得られた結果を統合して、本研究の結論を導き出した。調査内容を整理し、活動理論による「集団的活動システム」モデル(エンゲストローム 1999、山住 2004、山住他 2008、他)に当てはめ、ダイナミズム形成のプロセスについて考察した。

4. 研究成果

チュートリアルは、関わる教師全員にとって新しい授業形態であり、教師達が議論しながら運営方針や実践内容を決めて運用してきた。林(2009)は、「自律学習プログラム」は教育プログラムとして、学習者の潜在的な自律学習能力をいかに引き出せるか、あるいは自律性をいかに高めるかを問題にし、プログラムとして制度的に実施する際には、時間的・経済的な条件、学習経験、教育経験、理念の共有、人間関係、評価など、従来型の授業とは異なる点が制約となるとする。制約は外的な要因だけではなく、個々の教師自身のもつ教育観との葛藤からも生まれる。実践における制約や葛藤を克服しようとして議論が生まれ、教師たちは議論の中で「自律」の概念を問い直し、相互に修正することになる。実践のプロセスは、個々の教師の経験や意見が集団で共有され、集団のパフォーマンスとなって増幅され、再び個人に戻るというサイクルでもある。

行為者や活動システムの協働のパフォーマンスが創発的に共有されまた離れるとき、「ネットワーク(結び目づくり)」が行われる(山住他 2008)。ネットワークの特徴は、組織やチームがトップダウンではない意思決定を生み、決定が分散=共有されることにある。チュートリアルにかかわる教師集団の意思決定プロセスは、ネットワークの特徴に重なる。また、中田(2011)は、学校で学習者オートノミーを育てるためには教師のオートノミーを育てることが最重要課題であると述べ、教師オートノミーを持つ教師は学校における生徒、他教師、管理職という 3 領域との対話と同僚性を持つという。

このような教育現場のコミュニティは、活動理論による「集団活動システム」モデル(エンゲストローム 1999、山住他 2008、他)に当てはめることができる。

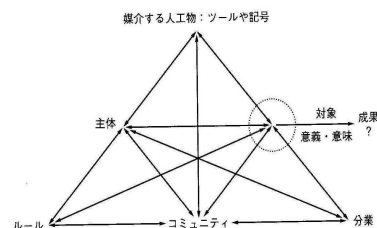


図1 「集団的活動システム」モデル

調査により得られたチュートリアルにおける教師集団の変化をこのモデルにあてはめたとき、下の 2 図が描けた。

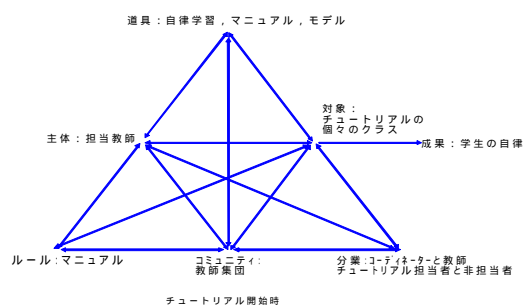


図2 チュートリアル開始時

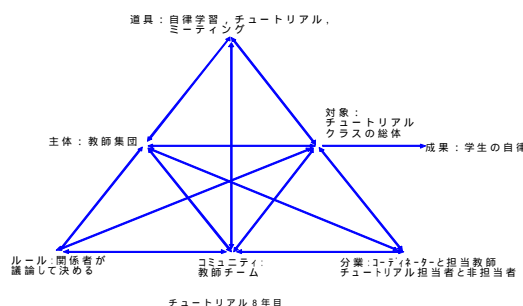


図3 チュートリアル開始 10 年後

チュートリアル開始時には、実践内容のモデルとマニュアルをコーディネーターが提案し、個々の教師が担当クラスでそれを実践した。

しかし、10 余年を経た現在、主体は教師集団に変わり、教師の働きかける対象はプログラム全体になった。コミュニティは協働の意思を持った「教師チーム」へと変わった。そのプロセスは、個々の教師の経験や意見が集団で共有され、実践の中で増幅されて再び個人に戻るサイクルであった。

このプロセスは、個々の教師の変容と教師集団のダイナミズム形成過程の相互作用ととらえられ、教育現場の文脈と時間の流れの中でそれが起こってきたことがわかった。

<引用文献>

アンリ・オレック、中田賀之他著、青木直子・中田賀之編、『学習者オートノミー 日本語教育と外国語教育の未来のために』、ひつじ書房、2011
エンゲストローム著、山住勝広他訳、『拡張による学習』、新曜社、1999
林さと子、「自律学習」を問いなおす』、『2009年日本語教育学会秋季大会予稿集』、日本語教育学会、2009
山住勝広・エンゲストローム、『ネットワーク 結び合う人間活動の創造へ』、新曜社、2008
妹尾堅一郎、『考える力をつけるための「読む」技術』、ダイヤモンド社、(2002
ウヴェ・フリック、『質的研究入門』、春秋社、2002
やまだようこ、『人生を物語る-生成のライフストーリー』、ミネルヴァ書房、2008

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 伸子 (SAITO, Nobuko)
桜美林大学・言語学系・教授
研究者番号： 90337890

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

池田 智子 (Ikeda, Tomoko)
桜美林大学・言語学系・教授
研究者番号： 00232190

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

末代誠二、松久保暁子、Brewster, Damon、林加奈子、池田智子、室岡一郎、齋藤伸子、蒔恩峰、「基盤教育の木」を完成させる - 基盤教育院のFDの取り組みと成果 -、OBIRIN TODAY 査読無、第16巻、2016、pp. 27-41

〔学会発表〕(計4件)

福島智子・藤田裕子・白頭宏美・三宅若菜・鈴木理子・梅岡巳香、学部留学生のためのメタ認知を利用した読解教材の開発、2016年度第2回日本語教育方法研究会、2017年3月18日、宮城教育大学
甲斐晶子、福島智子、藤田裕子、三宅若菜、白頭宏美、鈴木克明、日本語学習における自己調整学習支援体制の構築、日本教育工学会研究会、2015年10月31日、岩手県立大学
池田智子、齋藤伸子、Fostering Learner Autonomy in the Classroom: Working with Diverse Learners of Japanese as a Second Language、第40回全国語学教育学会(JALT)年次国際大会、2014年11月23日、つくば観光コンベンション協会
齋藤伸子、複言語時代と外国語教育、複言語時代の言語教育研究会第2回公開研究会、2013年9月21日、桜美林大学四谷キャンパス

〔図書〕(計0件)